
実 傳

元電信電話研究會々長工學博士 淺野應輔君略傳

本會の前身たる電信電話研究會の會長として多年熱心に盡瘁せられたる淺野博士は安政六年三月八日を以て岡山縣茶屋町に生る、嚴父は淺野意俊氏なり博士は實に其三男なり。明治十四年五月工部大學校を卒業するや直に同校教官に擧げらる十七年四月病の爲め教鞭を抛ち工部省電信局に轉じ上田、丸龜、岡山、赤間關等に赴任して電信建築に従事し二十年遞信技師に任ぜられ二十一年東京電信學校教授兼幹事となり又東京帝國大學工科大學に教鞭を執れり二十四年三月電信燈臺用品製造所技師と東京郵便電信學校教授とを兼ね同年八月遞信省電氣試驗所長を命ぜられ電信電話の設計試験を掌る二十六年歐米諸國に派遣せられ各種電氣工業發達の實況を視察し二十八年歸朝せらる

日清戰役後我が版圖に入れる臺灣と内地間に軍用海底電信線布設の擧あるや博士は之が工事主任となり二十九年より三十年に涉りて遂に大隅臺灣間八百六十八海里の沈布を竣成したり本邦に於ける現波通信線は之を以て嚆矢とす當時邦人の手に依り獨力海底線を布設し得るや否やは世人の大に危惧する所なりしに博士は此の難衝に方りて畫策宜しきを得完全に之を遂行したり功を以て勳五等雙光旭日章を賜はる

是より先京都市に起りたる鐵管腐蝕問題は幾多工業家の論點となり將來單線電氣鐵道の許否に重大の關係あるを以て朝野の間に異論百出決する所なかりしが博士は歐米に於て詳細調査せる結果に基き相當條件の下に斷然單線式を許可するの可なるを提議し本問題を解決せり

又明治二十八年伊太利人マルコニー氏は無線電信を發明し翌二十九年英國に於て特許を得たりしも當時世人は其の實用に供し得らばやを疑ひ殆ど顧みるもの無かりしに博士の慧眼なる必ず其將來に發達すべきを洞察し直に之が研究に従事し、部下を督勵し研鑽に研鑽を重ねて日進月歩、通信距離の如きも數哩より數百哩、數千哩に躍進し遂に世界に誇る可き本邦獨特の無線電信方式を大成せり、又部下を指揮して無線電話の研究を爲し好成績を得たり三十七八年日露戦役の功に依り勳四等旭日小綬章を授賜せらる。

明治三十二年工學博士の學位を授けらる又内務技師並に東京帝國大學工科大学教授を兼務す三十七年高等官二等に進む、三十九年五月獨國伯林に萬國無線電信會議の開かるばや博士は本邦を代表して之に列席し副議長の榮位に選舉せらる、同會議の後獨逸國は王冠二等勳章を贈與し以て博士の功勞を表彰せり

博士は又常に本邦に於ける電氣單本位の不正確にして電氣工業界に及ぼす弊害の多大なるを慨嘆せられしが明治四十一年十月倫敦に於て萬國電氣單本位會議の開催せらるばや選ばれて本邦委員となり之に列席せらる、歸來同會議の決議に基き本邦に於ける電氣單本位の制定並に電氣計器の檢定施行に劃策努力せられ遂に電氣測定法の實施を見るに至れり。博士は又夙に本邦電氣事業者の據て以て規準とすべき電氣事業取締規則の必要を認め其制定に努められ明治二十九年初めて之が實施を見るに至れるが爾來電氣事業の發達に伴ひ能く事業者の意見を尊重して其修正に吝ならず常に官民意志の疏通を圖り又電氣事業主任技術者資格檢定試験規則を創定して人材登用の途を開きたり

明治四十二年七月逓信省に新に電氣局を設けらるばや博士は電氣試験所長兼技術課長に任ぜらる、四十四年五月電話擴張調査會委員を命

ぜられ電話の改良に參劃せられ又電信電話技術調査會委員、主任技術者資格檢定委員長、電線番號稱調査委員長、周波數及配電電壓調査委員長等として廣く電氣事業に貢獻せられたる功績炳として世人の耳目に新なり、大正三年三月無線電信の功に依り勳二等に敘せられ同年四月高等官一等に陞敘せらる同年十一月後進の途を開かんが爲め挂冠せらる、在官中の功を録して從三位に進めらる

博士挂冠の後も電氣工學界の進運は永く博士をして閑地に就かしむるを許さず大正五年九月推されて早稻田大學理工科長となり六年三月東京帝國大學工科大学教授に任ぜられたり

博士は又選ばれて電氣學會長、日本電氣工藝委員會長等となり學藝界に貢獻せられたる所尠からず殊に大正三年三月電信電話研究會の創立せらるゝや推されて會長となり熱心に電信電話學術の研究誘掖に努めらる。本會が遂に今日の盛運を來せる所以のもの一に博士指導の賜にして本會の永く忘るゝ能はざる所なり。